

野口健が聞いた 英霊の声なき声

喜多由浩 著 (産経新聞出版, 2009年 8月 発刊, 1,300円+税)

Book Review

KITA, Yoshihiro: *Noguchi Ken ga Kiita Eireino Koenaki Koe*

北村 靖道*

KITAMURA, Yasumichi

世界的に有名なアルピニスト野口健に魅せられたこの本の著者、喜多由浩が野口とのインタビューを重ねて書き上げた本である。この本と野口健公式ウェブサイトに記載されている彼の生い立ちと活動の一部を紹介する。

両親が離婚した小学校6年生の頃から、心のすさんだ野口の学校の成績は落ち始める。父親の転勤に伴い英国で入学した全寮制の中高一貫校での成績は転落するばかりで、野口は自他ともに認めるツッパリ問題児だった。しかしアルピニスト野口が誕生したきっかけは、先輩を殴ったことで高校から下された1ヵ月の停学処分であったというから、人生は分からない。謹慎中に日本に一時帰国したとき、本屋で偶然手にした冒険家、植村直己氏の著書『青春を山に賭けて』に感銘を受けてから登山を始めたと言っている野口は語る。

最低レベルの成績で高校を卒業したおちこぼれの野口には学力で大学に受かる自信はない。そこで狙いを定めたのが本大学の一能一芸入試だった。高校2年生、16歳でスイスのモンブランと翌年アフリカのキリマンジャロに登頂したことを記した

書類と、外国で実体験したテロ事件を題材にした作文で書類審査はパスした。高倍率で難関の面接試験では、もし入学できたら「七大陸最高峰登頂の世界最年少記録を樹立する」と夢を語り、いわば「はったり」で本学に合格した。はたして1999年5月(25歳)に3度目のチャレンジでエベレストに登頂成功し、世界記録を樹立して入試面接で語った夢を達成した。それまでの足取りは次のとおりである。

- 1990年(16歳) モンブラン (4810m, ヨーロッパ大陸)
- 1990年(17歳) キリマンジャロ (5895m, アフリカ大陸)
- 1992年(19歳) コジアスコ (2228m, オーストラリア大陸)
- 1992年(19歳) アコンカグア (6960m, 南米大陸)
- 1993年(19歳) マッキンリー (6168m, 北米大陸)
- 1994年(21歳) ヴィンソン・マシフ (4892m, 南極大陸)
- 1996年(22歳) エルブルス (4892m, ヨーロッパ)

* 本学経営学部教授

大陸, ロシア)

1996年(23歳) チョ・オユー (8201m, アジア大陸)

1999年(25歳) エベレスト (8844m, アジア大陸)

世界記録樹立

野口は1997年に挑戦したエベレスト登山で目にした、日本隊が捨てた多量のゴミにショックを受けてから環境問題へ関心を持つようになる。捨てられた酸素ボンベや缶詰の空カンなどはもちろんのこと、食べ残しの生ゴミや人糞すらも、高山ではすべてそのままの姿で残り、朽ちることはない。理由はあまりの環境の厳しさに生ゴミなどを分解する働きをする微生物が生存できないからだ。ゴミを持ち帰る習慣のある欧米人の登山隊に比べ、環境意識が疎い日本隊の行動に心を痛めた野口は、1999年から4年連続して、世界各国の登山家たちとともにエベレストなど5000~8000m級の清掃登山に奔走する。ゴミ収集活動を始めると、日本の先輩登山家からはわざわざ恥を暴くなど、非難の合唱が起きた。2000年から野口が一人で始めた富士山の清掃活動は、今では数千人が参加する規模に拡大した。毎年ネパールに通う野口は、ヒマラヤ地域の氷河融解に危機感を抱き、温暖化対策の必要性を各方面に訴えている。

また2001年に、日本隊に参加して遭難したシェルパ(登山隊の案内人・荷役人)の遺族を支援する「シェルパ基金」を設立し、2008年には「マナスル基金」を立ち上げ、校舎、寮、グラウンドなどの学校建設を推進している。日本の国立公園や環境保護やエコツーリズムなどについて行政から意見を求められ環境省や東京都の委員も務めた。若い世代に環境教育を広める目的で始めた「野口健康環境学校」では、自ら全国の小・中・高・大学で啓蒙を行なっている。テレビや講演会などで多方面にわたり活躍する野口のことは良く知られている。しかし私が推薦するこの本のメインテーマである「遺骨収集活動」でも、めざましい実績をあ

げていることはあまり知られていないようだ。

野口は2005年4月に高度8000mのマナスル山中で猛吹雪に遭い、悪天候があと2日も続けば酸素が切れ、絶命するかもしれない危機に直面した。死を覚悟して遺書を書き始めた野口には「日本に帰りたい。せめて誰かが自分の遺体を見つけて故郷(日本)に帰してくれないだろうか……」との思いが募った。そのとき祖父などから聞かされていた戦没者のことが頭に浮かんだ。先の大戦中、本土以外で命を落とした日本人の将兵は本学キャンパスの興亜神社に祀られている学徒出陣97名を含め、約240万人に及ぶ。最も犠牲者の多かったフィリピン地域の戦死者52万人のうち約40万人の遺骨は未だ祖国に帰っていない。もし日本に生還できたら戦没者の遺骨収集に取り組むことを、野田はマナスルの死の淵で決心したのだ。

遺骨収集活動にはまず野口の周辺から反対があった。遺骨収集を主管している内外の政府や組織との摩擦も生まれた。

中国がチベットを弾圧していることに心を痛めていた野口は、2008年8月の北京オリンピックボイコットも選択肢に含まれると表明した。中国ルートのエベレスト登山に入国許可が下りなくなる恐れがあった。野口の活動を支援していた、中国と取引のある日本企業からは、スポンサーを降りられるかも知れないリスクも承知しての発言だった。とにかく野口は見えて見ぬフリはできない実直な性格の男である。新聞社の編集委員でもある著者、喜多由浩は、ジャーナリストが社会的使命に燃えてペンを取るのと同じように、世の中の不条理に敏感に反応し、情熱と勇気で果敢に世直しに挑戦し続ける野口の考え方と行動に共感し、将来の更なる活躍を熱望しているに違いない。

1992年に本学に入学した野口は、8年後の2000年春、26歳で本学を卒業した。かつての落ちこぼれ高校生、野口健は2014年4月から本学客員教授となって母校のキャンパスに舞い戻る。